
妬む男子学生の日常的生活

エルーモア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妬む男子学生の日常生活

【Nコード】

N37160

【作者名】

エルーモア

【あらすじ】

見た目はごく一般的な人物、島崎 光弥。そう、見た目は。彼は人より少し妬みやすく、少々不幸体質（女子関連に限る）だ。そんな彼の日常を覗いてみる？

一話目 残念な男(前書き)

のんびり更新です。

それでもいいよんという方はお気に入り登録でもなんでも図々しくてすみません。

一話目 残念な男

朝、学校に行くまでの道。たまにカップルが一緒に行っているのを見かけるときがある。

その時に俺はこう思うんだ。

ああ、妬ましいなあ。

* @ *

俺の名前は島草しまぐさ 光弥ひかりという。髪形をいじってもいないし、妙なアクセサリーも付けた事がない。自分を表わすのはこのメガネくらいだろう。

家族構成は一歳年上の姉と兄がおり、一歳年下の妹がいて、祖父母も両方とも元気である。

大家族という訳でもなく、特に目立った所はないだろう。

* @ *

現に今もこうして、歩いているカップルを少し妬みながらもごく一般的な学生と思われている。

そして、カップルが曲がり角を曲がり、姿が見えなくなったのを確認すると、

「なんなんだよ朝っぱらから見せつけやがって！！ あれですか、朝なら誰もいないとも思ったんですか畜生め！！ 残念、俺がここにいましたよ！！ いちゃいちゃして周りが見えず交通事故に会って氏ねリア充が！！」

力の限り、叫んだ。

@

俺の通う学校、私立キタジマ高校は「え、ゴキブリに勉強教えてもらってたの？」と言われるほどひどい学力をもつ生徒から、「うん、もうこの高校のレベルじゃないよね、キミ」と言われるほど高い学力をもつ生徒まで、幅広く扱っている。

校長の話では、頭が悪ければ体力をつければいいじゃない、この事だ。

俺はそんな校風を気に入っている。

と、そんなことを考えながら自分の教室「1 6」のカギを職員室で貰い、教室に入った。

もちろん誰もいるはずはなく、一番後ろの通学路が見える窓側の自分の席へ座り本を取り出して読み始めた。

@

「あ……いつも早いね、島草くん」

しばらく本を読んでいると、隣の席でありこのクラスの委員長である矢崎千紗が入ってきた。

息を切らしているところを見ると、どうやら走ってきたようだ。

俺に早く会いに来たくて走ってきた

という訳ではない。

このクラスに成り立てのとき、毎回急いで教室に入ってくるものだから一度気になって聞いてみたところ、

『私、誰もいないときの教室が好きなの……』

との事。

その日の翌日少しばかり遅れ（とは言っても十分くらい）、急いで教室に入ると、

矢崎さんが歌っていた。

矢崎さんは突然現れた俺に目を丸くし、そのあと顔を真っ赤にして

俯いてしまった。

そのあともなんやかんやとあったが簡単に説明すると、

『歌、上手いね』『じゃあ毎回聞いてくれる？』『いいともー』

だ。

そう、これを聞いてお前も立派なリア充じゃねえか！ と、怒る人もいるだろう。

しかし、しかしだ。とてつもなく残念なことに、矢崎さんには彼死かれしがいるのだ。

そう、彼死かれし。それを聞いた日には泣いたね。風呂場で。

……ああ、リア充………滅びねえかなあ………。

一話目 残念な男（後書き）

楽しかったのでしょうか？

二話目 家族（前書き）

遅れてしまいました！

ごめんなさい！

もう片方も更新したいのですが、こちらの案ばかりが浮かんできてしまつて……

二話目 家族

学校が終わり、家に帰るとリビングで俺の妹が勉強をしていた。

正直に言うと、俺の家系は美男・美女が多い。

しかも顔だけではなく、頭もいいのだ。

そのせいで俺の中学時代は真っ暗だった。

俺はその家系に反するように360。普通の顔で、普通の学力。

特に運動神経がいい訳ではなく、人並み。

もちろん初めの頃は同じ血を引いているんだから出来ないはずはない、と思いい人一倍頑張った。

それなのに帰ってきた成績はおよそ平均点程度。

先生たちも最初こそ見てくれたが、俺が中学2年生になって妹が入学してきた途端にもう見られなくなつた。

妹も成績優秀で容姿端麗だったからだ。

見放されているだけならまだしも『お前の兄はもつと出来た』『お前の姉は賢かった』『妹に負けてどうする』などとずっと言われ続けてきた。

そうだった辺りから、もう家族とはあまり話していない。

親は俺が小学6年生のときから海外で働いて、家に帰ってくることは年に2回か3回しかない。

「……………チッ」

真面目にお勉強をしている妹に声をかけずに、2階にある自分の部屋に入った。

今日はバイトは無かったよな……………よし。

俺はカバンを投げ捨てるとベッドに寝転がり、そのまま眠った。

@

『なんでお前は出来ないんだ？ お前の兄と姉はきちんとやっていたのに……………』

頑張っではいるんですよ！ 先生も知っていますでしょう！

『島草の兄って有名なあの先輩だろ！？ ……でもなんでお前があの先輩の弟なんだ？』

俺だって追いつくように努力はしてんだよ！

『お前は無理だろ、お前の兄や姉や妹なら出来るだろうけど』

どいつもこいつも……！俺は俺なんだよ！あいつらと比べんな！

@

「……ん、もう夜か……それにしても……クッ」

俺が起きるともう外は真っ暗だった。そして今見ていた夢の内容を思い出し、少し笑ってしまった。

あの頃の自分は少々思春期ということもあってか、その話になるだけで不機嫌になっていた。

今となっては懐かしい思い出だ。かと言って、もう家族と話そうとは思わないが。

「それにしても……腹減ったなあ……たしかカロリーツクールがあったかな」

カロリーツクールとは栄養バランス食品の事だ。今はチョコレート味、バニラ味、抹茶味など色んな種類がある。

腹を満たすだけでは足りないが、この際仕方がない。

俺は基本的に親の仕送りは使わないようにしている。なぜなら、頼ってばかりいると自立できなくなるからだ。

だから、掃除・料理・洗濯は出来るし、スーパーのおばちゃん並み

の観察眼を手に入れたし、ポイントカードは忘れない。

俺は早くこの家を出て、一人暮らしをし、そしてこの名字を捨てたい。

さすがに、バイトだけでは家を買えない。しかし、家を購入した後、高校を卒業して、就職が出来るくらいまでのお金があるので、就職できたら時間はかかるが、全額返すつもりだ。

今月の仕送りと来月の仕送りでついに家を買える。

……そのとき3年ぶりぐらいに兄、姉、妹と話すこととなるだろう。

きつと、あちらも俺の事なんかどうでもいい、むしろ早く居なくなってくれ、ぐらいに思ってるんじゃないだろうか。

ま、その方が楽でいいのだが。

一人暮らしをする日の事を思うと、ついテンションが上がってしまう。

「ふはは……!!」

テンションが上がったまま、カロリーツクールを取りにリビングに行った。

二話目 家族（後書き）

しくじってしまいました！

入れるつもりじゃなかったシリアスが……

うわあああっああああああああああ！！！！！

三話目 リア充への道……?? (前書き)

あんまり気が乗らないときに執筆してるんで、ちょっとつまらない
回になるかもしれません。

お気をつけて。

三話目 リア充への道……???

学校に向かうため俺は今電車に乗っているのだが、ちょっと今イラついている。

なぜかといえば……。

「ねえ、今日の授業って体育あったっけ？」

「うん……。あつたんじゃないか？ どうして？」

「シヨウゴと離れるのが寂しくて……」

「男女別だもんな……。俺も寂しいよ……」

「シヨウゴ……」

「カナエ……」

俺の目の前に座っている学生共がイチャイチャイチャイチャしていて気分が悪いんだよ！

「つたく！なあにが『離れるのが寂しくて……』だ、なあにが『俺も寂しいよ……』だ！

寂しいことぐらい我慢しろやリア充が！

しかもこいつらはまだまだまだ若いのに席に座っている。

俺なんか辛そうに立っていたおばあさんに席を譲ったというのに！
妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい妬ま
しい……………。

これ以上ここにいたら砂糖吐きそうになる。ちょうど着いたみたい
だし、降りるか。

はあ……………朝っぱらから気分悪いものを見た……………。

なんていうか自分が悲劇に遭っているような態度が気に入らない。

何よりもまだ若いのに席を譲らないのが駄目だ。あいつらの目の前
に高齢の方がいたというのに。

とか何とか思いつつ改札口を出て通学路を歩いていると、喧騒が聞
こえた。

よくよく見てみると朝から元気よくナンパしている不良さんと、そ
れをかなりいらぬ言葉をプラスして断っている女学生がいた。

「お前らのようなハエにも劣るモノが私たちに話かけることが出来
たことだけでも感謝するがいい。……………おっと、それだとハエに失礼
か。すまんハエたち、ゴミクズと区別するために使ってしまった」

「ごんの女ア……………！」

「なんだ？ 事実を言われて怒るとは知能が幼稚園児以下なのだな。
感謝しろ、お前の知能は人間扱いしてやる。まあそれも幼稚園児に

劣るのだが」

すごい人物だな、彼女。

彼女の後ろに二人の女学生を連れながらも三人の不良に怯えずに睨んで……ん？

いや、その女学生の目を見ると少しの怯えがある事が分かった。

俺は中学時代に鍛えた観察力で相手のマイナスの気持ちが分かるようになってしまった。

ただ、プラスの気持ちは全くといっていいほど見えない。

そんな目で見られた事なかったからなあ……ははっ。

と、そんなことより早く学校に向かわねば。

生憎だが俺は助ける気などない。

自分から挑発していて何も出来ないなんてバカらしすぎる。

さらに残念なことに今、俺が歩いている通学路は人が少ない。

朝早いという理由もあるのだが、関わられたくないということだけで避けている人もいるだろう。

結論から言わせてもらつと、彼女たちには味方がいない。

……ただ、自分はこの道を通らなければすごく時間をかけて学校に

行かなければならなくなる。

その道があいつらによってふさがれているんだよなあ……。

早く終わんねえかなあ……委員長、待ってるだろうなあ……。

……もういいや、あの間を通ろう。

「はい、ちよつと失礼。通してね〜」

「なんだあテメエ!」

耳元で叫ぶなって! 耳が痛い!

「いや、ちよつと通りたかつたんだよ。あんたらが道ふさいでるか
らさ、通るに通れないっての」

俺がビビらないことにちよつとひるんだのか、動きが止まる不良た
ち。

その間にスイスイと通って……無理。腕、掴まれた。

「なんだ? 何か俺に用?」

「ここを通りたきや金置いていきな!」

ギャハハ、と笑う不良たち。いつの間にか捕まっている女学生たち。

「仕方ないな、そんなに金が欲しいんだったら……はい、五円」

五円玉を二人の手においてやる。……金渡したのになんか不良さんたちに青筋が浮いてる。

「テメエ、なめてんのか!？」

「何を言う。」

「ちゃんと理由があるんだぞ。」

俺が五円を渡した理由は『御縁がありますように』。

あんたらはハガキなどに五円がついているのを見た事がないのか？
ほら相手に渡すことによって『貴方に御縁がありますように』って。

……という訳で。じゃ

ていつかそろそろ行かねば。あと少しで学校の門が開く時間になる。

「わ、私たちを助けに来てくれたんじゃないの!？」

歩きだそうとしたときに女学生の取り巻きが口を開いた。

……ん？何を言ってるんだこの子は。

「いやいや。なんで俺が見ず知らずの人間を助けないといけないんだよ。」

しかも自分から挑発して……ねえ?」

そう言うと顔を背ける女学生一同。

「なに無視してんだ、よ!」

「ぐツ!？」

俺が一同と話していると、不良が殴りかかってきてくらってしまった。

意外と結構痛かったりする。

「ちょっとちょっと!?!? 平和的解決法の話し合いの方向でいきま
せんか、ここは!」

「ハッ! あの女もお前もガタガタうるせえんだ、よ!」

「ぬおう!?!?」

あぶないな、これはマジで。

というか、時間!アウチ!もう普通の生徒がワラワラと湧いてくる
時間じゃねえですかいな!?

「仕方ない、……シッ!」

バチィ、と音がして不良の一人が倒れた。

俺の手に持っているのはスタンガン。

不良たちは俺が一人倒した事に慌てている。

「さ、どうする!?!?」

「ヒィィィ!?!?!」

ちよっただけ脅かすと、すぐに悲鳴をあげて逃げてしまった。

って、時間は!?!?

「時間時間……ヒィィィ!?!?」

8:15……ヤバいんですが!?!?

行け、俺! とにかく間に合え!

ふぐぐ!?!?

「「「あ……行っちゃった……って、こけてる!?!?」「「「

三話目 リア充への道……?? (後書き)

うーい。

楽しかったかい？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3716o/>

妬む男子学生の日常生活

2010年11月9日14時33分発行